「逃げろ」住民パニック

ジャワ島地震

津波おびえ 大渋滞

現地邦人 「柱しがみついた」

27日、インドネシア・ジャワ島中部ジョクジャカルタで、倒壊した家々の間をぬって避難する住民（ロイター）

「ドーン」という大きな音と激しい横揺れ。津波を恐れ、逃げまどう住民たち。近郊には世界遺産の寺院群もある、インドネシア・ジャワ島のジョクジャカルタを襲ったマグニチュード6・2の地震。現地に滞在していた日本人は、恐怖の瞬間と悲鳴が飛び交う町の様子を生々しく語った。

「タンスの引き出しがすべて飛び出し、床にモノが散乱した」。語学研修のためジョクジャカルタに長期滞在している横浜市出身の会社員安部なおみさん(26)は、午前6時ごろ、激しい横揺れに跳び起きた。すぐにベッドの上でうずくまったが、揺れは、とても長く感じたという。

しばらくして外に出ると、異様な光景が広がっていた。普段はのどかな道路が車やバイクで大渋滞。町は沿岸部から数十キロ離れているのに、「ツナミだ！逃げろ！」との声がとどろき、泣き叫んでいる人もいる。乗り物からはみ出すほどの家族を乗せた人々が、必死の形相で南の沿岸部から逃げてきた。テレビで繰り返し見た、2004年12月のインド洋大津波の記憶がよみがえり、「地震よりも恐ろしくなった」。

実際には津波はなく、夕方には騒ぎは一段落したが、「町の殺気立った様子が怖い」と外出を控えた。日本の大手商社に勤める安部さんは、昨年8月から現地の大学に通っている。「友達に携帯メールを出したが連絡がなく心配です」と心細そうに語った。

中心街から北へ約10キロのスレマン地区。「タキイ種苗」（本社・京都市）の現地子会社に駐在しているジョクジャカルタ日本人会事務局長の安藤貴央（たかひろ）さん(34)は、ジョギング中だった。突然、「ギーギー」という激しい音がして横揺れを感じた。現地で火山活動が警戒されているムラピ火山が噴火したと思った。だが、周辺の家屋が揺れているのが見え、建物がきしんでいる音だと気付いた。住民たちが外へ飛び出してきて、おびえながら家を遠巻きに眺めていた。

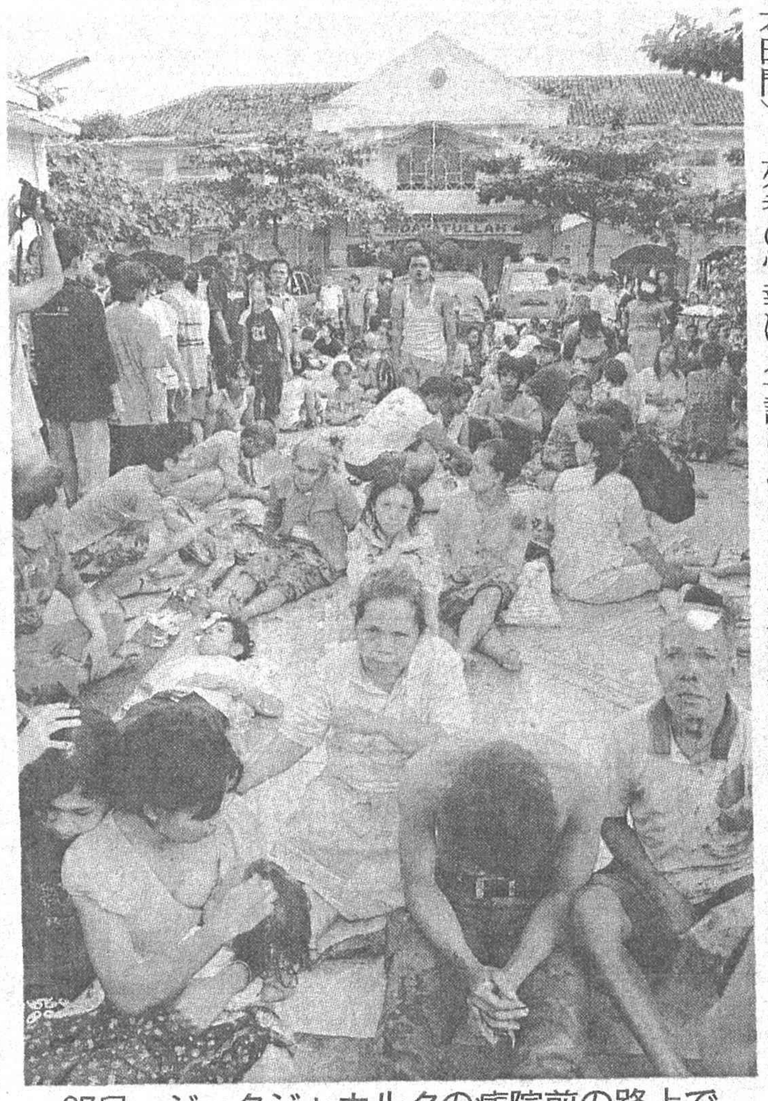
中心街では、体育館の屋根が落ちたり、ショッピングモールのガラスが割れたりして、ほとんどの店が閉じたまま。街は停電し、信号も消えていた。休暇でジョクジャカルタのホテルに宿泊していた男性会社員(47)（ジャカルタ在住）は、「ドーン」という大きな音と、突き上げられるような衝撃で目が覚めた。7階建てホテルの最上階。「建物が崩落する」と思った。10秒ほどの横揺れの間、部屋の柱にしがみついていた。

非常階段で1階まで駆け下りると、欧州からの観光客がガウン姿のまま不安そうに集まっていた。約2時間おきに余震があった。「怖くて部屋に戻れなかった」。結局、夕方までホテルのロビーや外で過ごした。

買入・販売
刀 古美術
創業明治13年
飯田高遠堂
東京目白駅下車3分
03-3951-3312

邦人11人負傷か

外務省海外邦人安全課によると、ジョクジャカルタ特別州には、同省に在留届を出している邦人が91人おり、27日午後9時現在（日本時間）、死者の情報は入っていないという。ただ、同州に住む邦人女性の住宅の屋根が落ち、女性はむち打ちの症状を訴えているとの情報があった。一方、同課によると、大手旅行会社5社の日本人旅行者計19人がジョクジャカルタ周辺に滞在したり、向かったりしていたが、全員の無事が確認された。



27日、ジョクジャカルタの病院前の路上で治療の順番を待つ負傷者（ＡＦＰ時事）

「家族無事か」連絡追われる

留学生ら

地震の一報を受け、西日本に住むインドネシア人留学生らは、現地の家族や知人の安否を気遣い、被災地の医療活動に従事してきたNGO「AMDA（アムダ）」（本部・岡山市）は、メンバーの派遣を決めた。

ジャワ島東部・東ジャワ州マラン市出身で、岡山大大学院で分析化学を学ぶ留学生、サバル・レイン・アハマルさん(32)は、両親の無事を電話で確認した後、マラン市の西約200キロのジョクジャカルタに住む友人の大学教授に何度か電話をかけ、ようやくつながった。

この大学教授の話によると、インドネシアを代表するヒンズー教寺院の遺跡で、世界遺産にも登録されている「プランバナン」にも被害が出たという。

教授の自宅は大きな損壊を免れたが、周辺では多くの家が倒壊したといい、アハマルさんは「これ以上、被害が大きくならないよう祈るだけです」。

ジョクジャカルタの大学での留学経験がある福井市内の主婦小国和子さん(37)は、現地の友人と連絡がつかず、「なんとか無事でいてほしい」と話した。

AMDAは28日、メンバー2人が韓国経由で現地に入り、約2週間滞在する予定。インドネシア支部所属の医師2人、看護師1人と合流し、医療活動を支援し、日本から必要な援助などについて情報を収集する。

女性スタッフは「スマトラ島沖地震の時の救援経験を生かし、早急に支援態勢を整えたい」と語った。